

## ムジールのベルリン修学時代

中 川 勇 治

Gerhart Baumann が 1953 年に書いた „Robert Musil, Eine Vorstudie“ を端緒とするムジール文学の学問的研究は現在までに著しい進展を見せているが、その成果はかなり偏向したものである。すなわち、今日までのところ大半の研究者の関心は「特性のない男」を中心とする作品の究明、解釈に向けられ、本文批判とか本文校訂等の文献学的究明あるいは作家論の基盤となるべき伝記的研究の面では甚だ遅れており、基準的労作はもっぱら今後に待つ状況にある。こうした状況の発生した一つの原因としてムジールが事実上今日の作家と見做されている事情が挙げられよう。「特性のない男」の第一巻は 1931 年、第二巻第一部は 1933 年といずれも戦前に出版されているが、今日ムジールのかち得た世界的な名声は 1952 年から 1957 年にかけて世に出た Adolf Frisé 編集の三巻本のムジール全集に負うところが多い。第三帝国時代のドイツではオーストリアをも含めてムジールの著作が発禁されていたため、戦後のドイツでは彼を知る読者が殆どおらず、従って全く新しい作家として受取られたのである。だからムジール発見以後の日が浅く、大半の読者はいまだに彼の作品の直接的影響下にあり、研究の面でも心理的、時間的に十分な余裕が生まれていないものと想像される。筆者の関心は、ムジールがいかなる内面的な変転を経て文学を生涯の課題にするようになったかにある。しかし今述べた研究状況のため筆者の関心を十分に満たしてくれるような労作は存在しない。本稿は筆者が限られた資料の範囲内でなんとか自分の問題を解明しようとする試みである。

1910 年 9 月 8 日といえばムジールが約七年間滞在したベルリンを去る数日前のことだが、この日、彼は日記の中に甚だ興味深い記録を残してい

る。

... 1905–1910 schließt mit einem Defizit an erreichten Zielen ab. 1905 noch der Törleß, 1910 nichts, Wien, Beamtenkarriere. Welche Hoffnungen haben sich mir als nicht realisierbar erwiesen! (Martha gehört nicht in diese Rechnung, sie ist nichts, das ich gewonnen, erreicht habe, sie ist etwas das ich geworden bin und das ich geworden ist ... davon spreche ich nicht.) (TAE S. 124 f.)

この記録は生涯の伴侶として選んだ Martha Marcovaldi に対するムジールの最大の贅辞を含んでおり、その限りでは美しい記録ともいえようが、彼がベルリン滞在中の五年間を振り返って成果の面で赤字の決算をしていることは意外な感じを与える。彼のベルリン修学時代は達成された目標という点から見ると本当に欠損であったのだろうか。彼の伝記をそれぞれの方法で手掛けた Karl Dinklage と Wilfried Berghahn はこのベルリン修学時代がムジールの作家生活にとって決定的な意味をもったと見做す点では全く一致している。彼の作家としての生涯においてそれほど重要な時期が赤字の決算をもって封じられるとは奇妙なことと思われる。少なくとも表面的に見るなら、1903年から1910年に及ぶムジールのベルリン滞在は決して赤字とはいえないような成果を挙げている。この期間に彼は文学上の処女作「生徒テルレスの錯乱」(以下便宜上「テルレス」と省略する)を生み出したばかりではなく、学位論文「マッハ学説批判への寄与」によって哲学博士号を得ている。さらに具体的な形をとらないまでも彼がこの期間に積んだ文学的修業はまさに驚くべきものがある。以上のような事実を考慮すると、はたしてムジールの行なった決算が正しいかどうかという疑問が生じる。またかりにそれが正しいとしても如何なる意味においてか。本稿ではこの疑問を出発点としてムジールのベルリン修学時代を検討してみよう。

ところでムジールの決算は1905年から1910年の五年間に限定されている。ところが彼がベルリン大学(正確にはベルリンのフリードリヒ・ヴ

ィルヘルム大学)に入学したのは1903年11月である。ムジールの決算はいよいよペルリンを去るに当って行なわれたものだから、本来ペルリン滞在の総決算と見做さるべきだろう。何故彼は1905年をもって決算の出発点としたのであろうか、これ以前の1年余の期間は何故問題とされぬのか。この点に関しては1905年4月2日付の日記が一つの解明を与えているようである。その冒頭の一節は次のような文章である。

Ich beginne heute ein Tagebuch; ganz gegen meine sonstige Gewohnheit, aber aus klargesehenem Bedürfnis. Es soll nach vier Jahren der Zersplitterung mir Gelegenheit geben, jene Linie geistiger Entwicklung wiederzufinden, die ich für die meine halte. (TAE S. 81)

この文章によればムジールはこの時までの四年間 „Zersplitterung“ の状態にあり本来の目標に向かって進み得なかった。さらにこの日の日記を読み進むと、彼が関心の対象を「人間についての科学」と名付けて今後の日記の中へ書いてゆき、「専門の哲学」は日記から除こうと考えていることが明らかになる。この日記全体から推測されることは、ムジールがこれまでの低迷錯誤を整理し自己の精神に秩序と方向を与えて本来の課題を追求しようと決心していることである。してみると大学入学以来この時まで彼は過去から引き続いて低迷状態にあったことになり、この時をもってようやく大学入学の目標に向っての努力が始まることになる。ムジールが決算を1905年から1910年までの五年間に限定した理由はおそらくここにあったのであろう。だがだからといって考察の対象をこの五年間にのみ絞ることは許されない。彼の決算の中で唯一の達成された目標として挙げてある「テルレス」は1905年3月上旬に完成したものであり、しかもその執筆開始は大学入学以前に遡るからである。換言すればこの処女作はあきらかに „Zersplitterung“ の状態において書き進められた、あるいはその一部をなしていたと考えられるのである。しかも「テルレス」はムジールがペルリン修学に臨んでみずから掲げた目標の一つであったことは明白である。ムジールの決算の意味を探ろう

とすれば、当然 „Zersplitterung“ の四年間、つまり 1901 年から 1905 年までの期間も検討されねばならない。

Dinklage の記述と Berghahn の伝記に付録として載っている年表に準拠しながら、1901 年から 1905 年までの ムジールの伝記的事実を挙げてみよう。1901 年 7 月、ムジールはブリュン工科大学の機械製造専攻学生として第二次国家試験を受けて合格、技師資格を得た。成績評価は「極めて優秀」であった。この時ムジールはようやく二十一才になろうとするところであった。同年 10 月 1 日、ブリュンを衛戍地とするオーストリー帝国フォン・ヘス男爵第四十九歩兵連隊に入隊し一年間の兵役に服することになった。除隊は翌年 9 月 30 日での時曹長に任官する。続いて 10 月より、ブリュン工科大学教授の職にあった父親アルフレート・ムジールの口ききで、1899 年に新設されたシュツッガルト工科大学の志願助手（実習生）となり技師実験所及び物料検査所に勤務しバツハ教授の指導を受ける。1903 年元旦にオーストリー陸軍の予備役少尉に昇進する。同年 4 月 15 日より 5 月 12 日まで陸軍の演習に参加するためシュツッガルトを離れる。5 月末より再びシュツッガルトに戻り工科大学の勤務を続けるが、この頃より哲学研究の希望を抱きもっぱら大学入学資格試験に備えて受験勉強を行なう。かたわら、「テルレス」の執筆を始める。1903 年 11 月ムジールはシュツッガルトを去ってベルリン大学に正式な学生として入学する。目的は大きくいって哲学研究であるが、専攻科目は論理学と実験心理学であった。指導教授は心理学者 Carl Stumpf。翌 1904 年 6 月 16 日、ブリュンにあるドイツ系国立ギムナジウムで大学入学資格試験を受けこれに合格する。1905 年 3 月上旬、「テルレス」を脱稿する。（ついでに付加えると、この処女作は 1906 年 10 月末にヴィーネル社から出版された。）

以上の事実は少くとも表面的に見るかぎりでは四年間の „Zersplitterung“ という判断とは必ずしも合致しないように思われる。„Zersplitterung“ は元来ガラス板などが石に当たって砕け散る状態などを示す言葉で、「分裂、分散、

散逸」などを意味する。比喩的には「精力、活動、時間などの浪費」をも意味している。とするとムジールは今述べた四年間を浪費したと考えるのであろうか、あるいは興味や活動が種々の対象に分散して本質的なものが得られなかったというつもりなのか。いずれにせよ、この言葉の本来の意味から考えて、ムジールがこの期間をもって低迷錯誤の時期と断じていることは明らかである。彼の事実上の経歴を眺めると、分裂とか浪費とかいう判断がもっぱら哲学研究を目標とする 1905 年 4 月 2 日現在のムジールの立場から下されていることは疑いない。その立場からすればムジールがベルリン大学入学以前に工学研究を行なったことは分裂とも浪費とも称し得るであろう。しかしそれだけの意味でならば彼の分裂は大学入学と同時に解消しなければならぬ筈である。ところが彼の分裂あるいは精力の浪費は大学入学後の三学期間継続している。大学入学資格試験の準備は本来の目的を達成する手段であるから分裂とは受取りがたい。すると「テルレス」執筆がこの分裂の内容をなしていることになる。つまり分裂云々が日記中に現われるのは「テルレス」完成のすぐ後なのである。このように考えるとき、工学研究も文学の試みもムジール元来の意図よりすれば精力や時間の浪費に他ならぬ。今、1905 年 4 月 2 日をベルリン修学時代の中仕切りと見做せば、この時点にいたるムジールのさまざまな努力は所詮自己の本質的欲求を発見するための摸索であったということになる。ムジールがこの中仕切りに至ってようやく自己を発見したとすると、彼がシュツガルト時代に「気も狂わんばかりに心を惹く」期待から工学を放棄して哲学を勉強しようとしたことは何を意味するのか。哲学研究の決意とは彼の自己発見ではなかったのか。彼はいったいいかなる意味で工学を捨てて哲学に転じたのであろうか。

ムジールは哲学へ転向するまでに既に一度自己の進路を変えている。これは士官候補生としてヴィーンの軍事工科大学に学んだときに決断され、普通の工科大学への転向であった。この転向の理由は比較的はっきりしており、ムジール自身も何度か後年の回顧の中で語っている。彼がそもそも普通の教

育を受けず幼年学校へと進んでいったのは、彼自身の決断の故よりは偶然の故であった。手に負えない強情な子供であったムジールは家庭内でしばしばトラブルを起した。やはり非常に勝気な性格の母親 Hermine はこの子の処置に手を焼き、夫を説得して軍隊教育を事とする幼年学校へ送り込んだのであった。子供の単純さでただ「長いズボンを身につけられる」という理由からローベルトは進んで幼年学校行きに同意した。しかしその教育の実態たるやまことに古めかしい非人間なものであったから、彼にとっては非常に辛い生活であった。ただ持ち前の負ん気と努力で彼は幼年学校時代殆どいつも優等生をもって通した。しかし軍隊に対する内面の嫌悪感は大きく、後年までも強く記憶に残った程であった。だから彼が幼年学校の課程を終了してさらに進んだ軍事工科大学で工学に興味を見出したとき、それは軍人生活を逃れる絶好の口実を与えた。元来ムジールの家系には技術者と軍人の面で成功者が出ており、ムジールが幼年学校へ入るについてもその家系の伝統が一役買っていた。しかし父親アルフレートは堅実で勤勉な工学研究者であったから、息子が軍人としての経歴を中断して工学を学びたいと申し出たとき喜びこそすれ反対すべき理由はなかった。軍隊生活に対する嫌悪、その運命主義的な発想法への反撥などが相俟ってムジールは工学へ転向した。後年、ムジールは変則的な学歴の故で総合大学へ進めなかったから、一番容易な工科大学へ進んだのだと語っている。いずれにせよ軍隊への嫌悪と工学への興味がこの転向の決定的理由であった。今、二度目の転向に当ってムジールはその理由を一度も詳らかに語らない。彼が日記、書簡、回想等の中でこの二度目の転向に触れるとき、彼はただ工学を放棄した事実を語るばかりである。たとえば、多分 1932 年に書かれたと推定される「遺言、その二」の中で次のように述べている。

Ich war 22 Jahre alt, trotz meiner Jugend schon Ingenieur und fühlte mich in meinem Beruf unzufrieden. Warum ich mich damals so sehr langweilte, will ich hier nicht erzählen. Stuttgart, wo sich

das abspielte, war mir fremd und unfreundlich, ich wollte meinen Beruf aufgeben und Philosophie studieren (...). (TAE S. 803)

また1904年に書かれた日付のない記録にもやはりこの事情に触れているものがあるが、理由としてはせいぜい „Ekel vor allem Technischen“ という語句しか見当たらない。しかもこの記録は半ば空想めいた性格のものだから工学に対するこの嫌悪感にも相当誇張があると考えねばならない。

何故ムジールが工学に背を向けて哲学研究を志したか。この重要な疑問の解決にはこの当時彼がいかなる精神的状況にあったかを検討しなければならない。

1898年、つまりブリュン工科大学に転じた年に、ムジールは日記の中で自分を „Monsieur le vivisecteur“ と称し次のように書いている。

Mein Leben: — Die Abenteuer und Irrfahrten eines seelischen Vivisectors zu Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts! (TAE S. 25)

十八才の青年が自己認識と世界探究の欲求に駆られてみずからの心理を生体解剖しようとする事自体なんら珍しいことではなく、せいぜい響きのよい名前に感心させられるくらいが関の山である。ただ過去に固苦しく制約された軍隊教育しか経験していない青年がおのれの前途に精神の冒険と彷徨遍歴を望んでいる点が注意を惹く。彼はさらに続けて „Monsieur le vivisecteur“ とは何かと問い、「ひょっとしたらいつか姿を現わす頭脳人間 (Gehirnmensch) のタイプだ」と自答している。「頭脳人間」とはそもそも如何なる類の人間か、この点については何の説明もないが、おそらくは徹底した合理的思惟によって世界を全く冷静な態度で厳密に律しようとする、悟性に貫ぬかれた人間の謂ではないかと想像される。この当時ムジールは工科大学に入ったばかりで工学の示す合理的思惟の強力さにすっかり魅せられていたようである。いまだ挫けざる若い力に溢れた青年ムジールが軍隊を離れて始めて経験した自然科学の世界に途方もなく巨大な期待を寄せたとしても不思議ではない。こうした若さのもたらす悟性信奉をムジールは後年「特性

のない男」の中で諷刺的に描いている。たとえば自然科学における悟性の働きを計算尺に象徴させてこんな皮肉なことをいっている。「計算尺を持っていれば、誰かが大きな主張だとか大きな感情とかをひっさげてやってきても、まあ待って下さい、お話の誤差の限界ともっとも確率の高い値を計算してみましよう」(MoE S. 37)。

当時のムジールがこんな具合にもっぱら悟性万能を唱えていたとはいえない。やはり同じ時期に属するエッセイめいた文章に「様式化した世紀の中から」と題するものがあって頭脳人間の逆の存在「透視者」を称揚している。「道路がどんなふうに見えるかご存知ですか」という奇妙な質問に始まるこのエッセイは、人間の慣習化し固定した発想形式の相対性や一面性をユーモラスに指摘する。人間が不断習慣上申し合せによって正しいとしている物事の見方以外にも事物の存在様式があり、そのことを悟らずにもっぱら習慣的な $2 \times 2 = 4$ という論理を唯一絶対とする人間は盲に等しい。普通の論理の背後に暗い姿を現わすもの、魂の瞬間的な飛躍だけがとらえる事物の第二の存在、これに気付くとき人は盲人の群の中の透視者となる。道路は単純明解な道路ではなくなり、たとえば四角で真直ぐなものだが同時に幾多の謎に満ちた奇怪なものとなる。このような常識論理の背後に開かれる世界を透視しながら完全にその世界に身を投げ出さず——それは狂気の世界である——現実の常識の世界に留るとき、人は途方もない優越感を覚える。それは「無信教者の宗教」なのである。

ムジールがこのエッセイ風の文章の中で描き出している事物の存在形式は、常識的な悟性論理からの飛躍によって顕現する神秘の世界ではない。彼の強調している点は感覚の相違であって、常識論理の否定ではない。つまり悟性の傍に感性が独立的に存在しうることをいっているのである。この思想は後に「テルレス」の中に見事に描き出されている。生徒テルレスの錯乱は常識論理の背後に突如姿を現わした感覚の世界の強烈さに驚愕したために生じた。錯乱はテルレス少年が事物の二義性を認識したときに解消した。彼は



事物をあるときは悟性的に、あるときは感性的に眺めようと決心する。それは根本的には世界のありかたに絶対的、一義的な性質を認めまいとする精神的態度に他ならない。しかしこうした思想がただちに青年ムジールの内面を捉えたのではない。あるときは悟性一辺倒に、あるときは感覚世界への傾倒という形で彼の精神が揺れ動いていたようである。おのれの内面の問題を集約的に悟性対感性の抗争と名付けているムジールの実態は以上のような内容のものであった。この内面的葛藤はやがて何人かの思想家の書物に接するにつけ次第に深いものとなってゆく。おそらく1900年頃に書かれたと推定される日記の中でムジールは哲学者カントに触れて次のように書く。

Ich habe Kant nicht zu Ende gelesen, aber ich lebe beruhigt weiter und fürchte nicht vor Scham sterben zu müssen, daß ein anderer bereits die Welt restlos erfaßte. Es gibt Wahrheiten aber keine Wahrheit. Ich kann ganz gut zwei einandar völlig entgegengesetzte Dinge behaupten und in beiden Fällen recht haben. Man darf Einfälle nicht gegeneinander abwägen ... jeder ist ein Leben für sich. Siehe Nietzsche. (TAE S. 32)

ここでは「様式化した世紀の中から」に見られた感覚の相違による悟性論理超越が一步前進し、悟性そのものの世界にも絶対的な真実はないと考えるようになっている。してみるとこれは既製論理の全面的な否定ではなく、その正しさを認めつつもそれが一面の真実しか示さないという指摘である。換言すれば絶対的な真実は存在せず、真実と称されるものは常に相対的だという考えである。こうした発想から「特性のない男」の主要テーマの一つ「可能性感覚 (Möglichkeitssinn)」に至る道程はほんの僅かである。この可能性感覚はムジールの青年期において特にニーチェとの邂逅によって目覚めたようである。同時代の精神界の人々と同じ運命を担って彼もやはりニーチェという巨星の光の下に自己の精神形成を行なったのである。つまりニーチェ以後の世代に属する者として彼も、ゴットフリート・ベンンの次の言葉の意味

で、ニーチェを免れ得なかったのである。

Eigentlich hat alles, was meine Generation diskutierte, innerlich sich auseinanderdachte, man kann sagen: erlitt, man kann auch sagen: breittrat ... alles das hatte sich bereits bei Nietzsche ausgesprochen und erschöpft, definitive Formulierung gefunden, alles Weitere war Exegese. (Zitiert nach Ingo Seidler, DVjs. 1965 Heft 3. Seite 329)

事実、1902年5月15日の日記はこの事情を裏書きしている。

Schicksal: Daß ich Nietzsche gerade mit achtzehn Jahren zum ersten Male in die Hand bekam. Gerade nach meinem Austritt von Militär. Gerade im soundsovielten Entwicklungsjahr. (TAE S. 37)

ニーチェを運命と感じた二十一才半ばのムジールの直感は正しかった。たとえば「特性のない男」の Clarisse の形をとって多少戯画化されながらもニーチェの思想は生涯ムジールの関心の的であった。しかしこの当時のムジールはまだニーチェの思想を深く理解できず、主としてその独得な発想形式に惹きつけられていた。「明るく、軽ろやかで譲るようなもののいい方」が彼の注意を惹いていた。しかし若くて行動欲、実行欲に駆られていた当時の彼にはこの「譲るようなもののいい方」自体が物足らなく思われるのであった。彼はいう

Das Charakteristische liegt darin, daß er sagt: Dies könnte so sein und jenes so. Und darauf könnte man dies und darauf jenes bauen. Kurz: er spricht von lauter Möglichkeiten, lauter Kombinationen, ohne eine einzige uns wirklich ausgeführt zu zeigen. (TAE S. 36)

ニーチェのこのいい方こそ例の可能性感覚の表現に他ならぬのだが、ムジールはまだこのいい方を受け容れられない。彼の内面にはまだ世界を一義的、絶対的に把握したい強い欲求が動いているのである。だから図書館よりニーチェを借り出し新しい期待に燃えて読み出し、「運命」という言葉を日

記に書きつけた旬日の後、偶然手にした実証主義者エルンスト・マッハの著書を読んで改めて自分の悟性的傾向を確認しているのである。

Mach's populärwissenschaftliche Vorlesungen fielen mir heute zur rechten Zeit in die Hand, um mir das Vorhandensein einer vorwiegend verständlichen Existenz von trotzdem hoher Bedeutung zu erweisen. Schließlich habe ich ja daran nie gezweifelt — (TAE S. 37)

ムジールが後年哲学学位論文にマッハを扱う機縁はこの時生じた。しかし彼はマッハとの出会いによって再び工科大学入学当初のような悟性万能に立ち戻るのではない。引用文に続いて „aber ich erlaube mir, mich hiermit nochmals zur Vorsicht zu erinnern!“ とさらに戒心をおのれにいいきかせるムジールなのである。つまり工科大学在学中からシュツッガルトの助手勤務の頃にかけて彼の内面は悟性対感性の抗争の場であり、右に左に揺れ動いていたのである。この揺れ動きは結局彼の全生涯を通じて止むことがない。ただ工学研究に携っていた当時は殊のほか激しかったといえる。この内面的動揺の根底には自己を完全に没入させうるような対象への渴望があった。1902年5月31日付の テュルカ夫人——当時の文学上の知己——あての便りでムジールは「悟性対感性の抗争」を委しく語っている。彼はまず、この内面的分裂のために何事にも集中できずいかに無為な日常を送っているかを具体的に述べ、続いてその無為が自分の将来への期待や憧れ、また見通しなどの交錯が生みだした精神の無秩序な動きであることを説明している。彼は将来、ただ悟性のみを手段として外面だけに係り合うような仕事ではなく、自己の全人格をあげて没頭できるような対象を求めている。そういう対象が肝心であって、芸術とは自己の人格を高める手段にすぎないと断言する。この便りはムジールの兵役服務中に書かれたものであるから、兵役の単調な営みや精神的な退屈が刺戟となって実際以上に誇張された調子のものであることはたしかだ。しかし彼が未来への期待として全身全霊をあげて打込める対象を求めること自体、工学に対する不信の念が深まってきたことを推測させ

る。さらにこの便りの中でムジールが「人格」をもっとも広義な「感性」に置き換えていることは彼の内面で感性が強力な存在になったことを示している。またこの便り自体が当事の文学仲間であるテュルカ夫人に宛てられていることも興味深い。ムジールはブリュン工科大学に入って以来この地の友人達と文学的な習作を続けていた。もちろんそれは素人の文学愛好を示すだけの試みであって、ムジールの本質的な欲求に根ざしたものとはいえない。しかしこの文学的な試みが彼の感情教育に役立ったことも同様に否みがたい。さらに彼の個人的な恋愛体験も感性の強さを自覚させたものと想像される。おそらく1901年の秋、ムジールはブリュンの女優 Valerie と激しい恋に陥り、最初の強烈な愛情の体験を積んだのであった。自分の日記の中でこの恋を「ヴァレリー体験」と名付けたムジールは、1903年に試みた小説——これはモチーフの点で後年の「特性のない男」の最初の萌芽と見做されるが、執筆僅かで中止された——の中でこの体験を扱っている。

Es kam ein ungeheurer Sturm. Zum erstenmal trug seine Sinnlichkeit den roten, goldgestickten Mantel der Liebe. Sein ganzes Wesen wurde verändert. Etwas Gütiges, Schenkendes überkam ihn. Weite Gedankenstrecken, kunstvolle Gedankenverschlingungen wurden klar. In wenigen Wochen reifte er weit über sich hinaus. Seine Gedanken und Empfindungen ordnen sich; die Philosophie der Stille und Reife bildet sich heraus. Dann kam die Ernüchterung. Einfach, kurz, notwendig. Sie waren fertig miteinander. „Es ist unsittlich länger zusammen zu bleiben, wenn nicht jede Stunde der Seele Wachstum bringt,“ sagte er, „leb wohl.“ (TAE S. 56)

この体験は感情が全人格の変化を惹起すほど巨大な力を備えていることを青年ムジールに教えた。一方、悟性はたしかに世界を人間的意志の下に征服する重要な手段ではあるが、人間存在を全体として決定するような力を持たない。ムジールは1902年5月26日の日記の中で前出のマッハに触れながら

この見解を語っている。

Meine Abkehr vom Verstande ging davon aus und entstand dadurch, daß ich annahm: Mag auch der Inhalt des Verstandes fortschreiten, die Erkenntnis sich entwickeln, der Typus Verstandes-mensch (Gelehrter, Forscher) ist sich durch die ganze Zeit gleich-geblieben. Etwa um ein Beispiel zu geben: Das „Menschliche“ in Mach ist heute noch dasselbe, das es in Galilei war. (TAE S. 37)

このように悟性の作用が人間の全人格に及ばないという洞察から、ムジールが次第に悟性を土台とする工学の本質的な矮小さ、偏狭さを見抜くようになったと想像される。「特性のない男」の主人公ウルリヒが工学や技師という職業に嫌悪を感じて放棄する理由もやはりこの工学の偏狭さの故であった。前出の計算尺による全ての問題解決を望んだウルリヒは工学研究に携る同僚達を観察しているうちに、彼等が完全に職業に埋没し専門以外の事象にはなんら興味を持たない事実には愕然とする。悟性による徹底的な世界把握を望んだウルリヒはとんでもない異端者であったのだ。工学の力強い悟性論理は技師達の人間を変革しなかったのだ。科学そのものへの興味ではなしに、科学へ人間的に惚れ込んだウルリヒは結局技師としての職業を断念する。これは小説の話だが、ムジール自身もやはり同じ理由から工学へ背を向けたと推測される。これまで見てきた常識論理の超越、可能性感覚、悟性への不信などはこの推測を裏づけるものである。

既に十八才で精神の冒険と彷徨遍歴を前途に期待したムジールは、最初こそ技術精神のもつ新鮮な魅力に傾倒し計算尺を片手に世界のすべての問題を解決し得ると信じこんだ。しかし恋愛体験を発端とする感性の活動は次第に彼の視野を拡げ、結局技術精神の偏狭さを認識させたのであった。ムジールがシュツガルトで新たな精神の冒険に出掛ける決心をしたのは以上のような彷徨の挙句であった。

ムジールがこの時直接文学の世界に乗り出さずに哲学研究を志した理由は

比較的容易に推測できる。当時の彼にとって文学は未だ本質的な欲求の対象ではなく、前出のテュルカ夫人宛の便りが示すように、人格形成の一手段でしかなかった。当時の彼の関心は文学よりはむしろ哲学的な問題にあり、カント、ニーチェ、エマソン等が彼の思想に大きく影響していた。また根本的にムジールの全生涯についていえることだが、彼の関心は世界における人間の運命という問題に向けられていた。たとえばテルレス少年が世界認識の一方法としてカントに取りついたように、哲学は世界を把握する道としてムジールに受取られていたようだ。しかし既に自然科学的思惟を身につけみずからもそれを強力な手段と見做していたムジールは思弁的な形而上学を志したのではなかった。彼が哲学研究の目標の下に論理学と実験心理学を専攻した事実がそれを示している。したがって工学から哲学への転向は悟性から感性へという極端から極端への飛躍ではなかったのである。それはあくまでも彼の本質的な傾向の継続であったといえよう。

哲学研究は彼の本質的な要求に根ざしていたから、彼の準備も徹底的であった。ただ哲学的教養を得ようとするだけならば、準備は不要であり、大学入学資格試験を二十三才にもなってから受ける必要もなかった。彼は哲学研究を思い立った当初から哲学の学位を目指していたのであった。もちろんこれはムジールが始めから将来哲学研究を職業にしようと考えていたことを意味しない。学位は彼の勉学の一応の目標であったのだろう。性格上、彼ははっきりした目標がなければ仕事に意欲が湧かぬ人間だったから、この目標を選んだとも考えられる。大学入学資格試験のための準備は入学後も続いた。本来の目的達成に必要な廻り道ではあったが、結局は付随的な努力であったから、ムジールは入学後直ちに専門の勉学に没頭できず不本意な日々を送っていたと想像される。1904年の日記帳の中で日付はないが、おそらくはこの試験合格後に書かれたと思われる記録の中で、彼は空想にかこつけながらこの間の精神状況を描いている。

Denken Sie sich nur einen Menschen in den Jahren der ersten

Kraft, der (—) um sich nicht zu zersplittern — nicht einen Gedanken darauf verwenden kann, wozu er sich berufen fühlt. (TAE S. 58)

「やっと本来の生活への門を爆破した」ばかりなのに、どうでもよいようなことと取組まねばならなかったムジールはしばしば「自己自身との不和」の時間を経験した。そうした時間に彼は「テルレス」の稿を続けてみずからを慰めていた。そんなわけで大学入学資格試験の成績も余り香しくなく、作文ではようやく中の下の評点を得たほどであったし、さらに専門の論理学や心理学の成績はもっと悪かった。しかしムジールが切実に哲学研究への献身を望むなら、大学入学資格試験に合格した後ただちにそれに取り掛ってもよかった筈だ。事実上は「テルレス」が完成した後になってようやく自己反省に入っている。従って哲学研究という本来の目的からすればこの処女作の仕事もやはり分裂の一端を担っていたわけである。一旦やりかけた以上は仕事がどんなに心に染まぬ性質のものでもやり遂げずにはおかぬという強情さ、虚栄心はムジールの性格の一部をなしているが、この性格がここでも作用したようである。1903年8月1日のテュルカ夫人宛の手紙の草案に明らかなように、ムジールは受験勉強の退屈さを紛らすために幼年学校当時の体験をもとにして思春期小説を書き始めたのである。しかもこの時、彼にはこの「テルレス」が自分の本質とは何の関係もないものと思われていたのだった。そうした非本質的な対象が上に述べた入学後の憂鬱な状況の中で次第に深くムジールの心を掴むようになっていったことは皮肉である。すなわち、例の中仕切りに到達したとき、文学はムジールにとって単なる人格形成の手段ではなくなり、哲学と同程度あるいはそれ以上の関心事となってしまった。分裂と称された付随的な努力の中からいつの間にかムジールにとって根本的な重要性をもつ対象が現出した。中仕切りは単純に本来の目標への復帰を意味するものではなく、哲学研究の傍に文学修業が哲学以上の権利を要求して立つようになった目標の変化を示している。彼が「テルレス」の出版元を求めて

奔走したり、おのれの文学的才能の保証を得んとして文芸評論家ケルを訪ねたりした事実がこの変化を裏書きしている。「テルレス」の出版が1906年10月、この小説が成功を納めるきっかけとなったケルの好意的批評がベルリートの新聞「デル・ターク」に現われたのが1906年の暮れであるから、中仕切り以降のムジールは主として文学的な関心に従っていたようである。実際、中仕切り以後の日記々録は大半、文学修業を示唆する内容を持ち、いわゆる「専門の哲学」は殆ど現われない。もちろん彼の文学への傾斜が短時日の間に顕著になるのではなく、文学と哲学との間の揺れ動きは鮮かに見て取れる。たとえば中仕切りから一カ月経った日の記録では「あらゆる文学的思想は消滅したかのようだ。ある種の受身な哲学的興味が残っている」(TAE S. 87)と記されている。しかしその十日程後には、哲学にも文学にも満足しきれぬムジールが姿を現わしている。彼は「自己自身との対話」と題する一文の中で、哲学者には人間味が乏しすぎ、芸術家には哲学的な厳密な思考が欠けていると嘆く。同時に彼は自分が芸術家であると思うと語り、思考を素材とする文学の可能性を思量する。彼の哲学観念は今までよりも大きなものとなり、本来芸術家の本質と思われたものをも取り込んでいると語っている。いずれにせよ彼の内面はまたもや二傾向の交錯に動揺し、中仕切りに宣言された秩序も安定も失われてしまったようである。時折、自己の彷徨を反省して再び本来の目標に立ち戻らねばと意識することもあるが(TAE S. 92)、実際には次第々々に哲学研究から遠ざかってゆく。一方、文学修業の方も一向に進展せず、彼の大半の努力は自己の文体の発見に向けられている。「特性のない男」の萌芽ともいふべき草案がつくられたり、「トンカ」のテーマが部分的に日記中に現われたりするが、いずれも断片的なものである。「テルレス」のように永く胸中に暖めた素材もなく、また自己の文体を造り出しえないための苦悩があった。それは彼の文学的関心が一層深まったことを示すものともいえよう。こうしたムジールの文学的関心の増大を間接的に証明するものとして彼が1906年に書いた哲学研究の結論がある。



*Ein Schluß auf die Philosophie von ihrem Studium aus.* Als Studierender der Philosophie macht man eine Erfahrung, die auf die eigentümliche Stellung dieses Denkgebietes zwischen Wissenschaft und Dichtung schließen läßt, wobei es weder die Vorzüge der einen noch der anderen teilt.

Die Literatur aller drei Gebiete ist unermesslich. Der Dichtkunst gegenüber könnte man allein bei Betrachtung der Produktion eines einzigen Jahres verzweifeln. Und doch findet man aus dieser Unendlichkeit mit instinktiver Sicherheit nur ein paar Bücher heraus, die einem wichtig werden. Die Literatur der exakten Wissenschaften hat dagegen den Vorzug, daß jedes Buch seine Vorgänger modifiziert, weiterbildet, überflüssig macht. Nur in der Philosophie weiß man nicht, von wem man lernen soll. (TAE S. 105)

四年間の分裂の後に改めて本来の目標たる哲学の勉強に励み、かたわら文学修業を積もうと決心したムジールが、「テルレス」の成功が納められた1906年には、まるで大学に入りたての若者のように方向がわからなくなっている。もっともこの結論を読んで単純に、ムジールが哲学を理解できなかったと見るのは早計である。後年の回顧によれば、彼が哲学研究において本来専攻しなかったのは倫理学であった。その意図が果されなかったのは、彼にふさわしいアプローチの方法が見出せなかったためである。こうした事情もあったし、「テルレス」の成功が作家としての可能性を暗示したためムジールはいつか哲学研究を副次的な目標と見做すようになっていった。大学での学業の終結は文学という目標に向うための手段となる。この心境は日記や小説草案の中に散見する。学位論文の作製はもはやまったく義務的な課題と受取られるようになった。ここにもまた心に染まぬ課題でも目標と選んだ以上はやり抜くという奇妙な性格が働いているようだ。1907年2月17日付の日記中に始めて学位論文の執筆状況が書かれている。彼の仕事は一向に涉らず、時間

だけはあっという間に流れ去る。彼は自己を喪失しはしないかと恐れ、転地や散歩、自由な読書等を渴望している。そして „Der Vorbedigung, dem Doktorat, komme ich aber nicht näher“ と嘆息を洩らしている。その記録の最後に「どうしてもやらねばならないと決心したもの、文学史の勉強、判断及び感情の心理学」と記している。ここからも彼が学位論文を一種の義務と感じ、殆ど嫌々ながら取組んでいる様子がうかがわれる。同年2月22日には、苦しんだ挙句ようやく一種の妥協策を見つけ出し、どうやら半ば構想がまとまったと書きつけている。続く同年3月11日、「毎日が鉛のように重苦しく延びてゆく。私は仕事の衝動にかられたミイラ以外の何者でもない」。このように学位論文の執筆は彼にとって心理的に甚だ重荷であった。これが続いてどのような経過をたどって完成し、それを巡って指導教授 Carl Stumpf とどのような論争がかわされたかは、日記その他ムジール自身の言葉からは窺い知ることができない。彼の日記々録は1908年から1910年にかけて断絶しており、この時期の書簡なども見当らないからである。ムジール全集の編集者アドルフ・フリーゼの解説によると、ムジールの日記々録には三つの中断期が見られる。ここで問題とされる時期が丁度その一つに当たっている。フリーゼは次のような推定を下している。ムジールがしばしば言及するが現存せぬ「四十冊のノート」が偶々この時期の日記を含んでいるとは考えられない。彼が日記や覚書類を保存した慎重なやり方から判断して、「四十冊のノート」が紛失することはあり得ない。これはおそらくムジールの記憶ちがいで、実際上日記は書かれなかったのであろう。

このフリーゼの推定はおそらく誤っていないようだ。既に見たように心理的負担の大きかった論文作製の努力は必ずしも立派な成果を挙げ得なかった。彼の指導教授であり論文審査の任に当たったシュトゥンプフは彼の論文に満足せず、すぐに受理しようとはしなかった。結果的にはムジールは自説を貫いて学位を得たのであるが、論文作製中の心理的負担やシュトゥンプフとの論争を考慮すると、学位獲得は余り大きな成功の喜びとはならなかったよ

うだ。

彼の学位論文「マッハ学説批判への寄与」は、マッハの実証主義的自然科学観に基いた認識論を論理的整合性の見地から批判したものである。人間の行為を始め学問的思惟すらも進化論的な立場より、経済性、有効性の尺度をもって律するマッハは、自然科学において実体化した自然必然性、法則性などの概念を否定する。しかもその否定は自然科学の本質より当然導き出されるものだとしてマッハは主張する。自然における一切の目的を否定し、因果律を拒否し、実体概念を函数関係に置き換えようとする実証主義者マッハの認識論的思考は少なからずムジールの共感を呼び起した。すでにムジールの工学への傾倒の例に見られたごとく、悟性万能的な世界観は彼の内面における悟性的傾向と一致するものであった。彼の論文は論理的な整合性、首尾一貫性という面ではマッハの学説を否定するが、その考え方自体にはむしろ明らかな賛意を表している。たとえばムジールは論文の結びにおいて一応マッハ学説の論理的矛盾を指摘してはいるが、次のような言葉を付け加えるのである。

Freilich gilt dies nur bezüglich der letzten metaphysischen und erkenntnistheoretischen Resultate, wie sie hier erwogen wurden. Im Einzelnen sind die Schriften Machs, wie ja allgemein anerkannt ist, voll der glänzendsten Ausführungen und fruchtbarsten Anregungen, deren Betrachtung aber nicht mehr in den Rahmen unserer Aufgabe fällt. (Diss. S. 124)

シュトゥンプフは元来心理学者で、音響心理学の分野では古典的な業績を残した人であるが、当時の未分化な学問の状態では哲学者でもあった。Franz Brentano に師事してその現象学的学風を受け継いだ彼は、究極的には自然必然性とか自然法則性を前提とするヘルムホルツ流の認識論の立場にあった。従ってマッハやアヴェナリウス等の実証主義的相対論はとうていシュトゥンプフの受容れるところではなかった。彼は1924年自己の哲学観を

簡潔に表明した文章の中で実証主義に触れて次のようにいっている。

Alle positivistischen Wahrheitstheorien, auch der Pragmatismus, drehen sich im Kreise. Nur als Maximen des Denkens bleiben Ökonomie und Nützlichkeit immer beherzigenswert. (Stumpf. S. 237)

実証主義的見解への共感を露骨にあらわしたムジールの論文をシュトゥンプフが簡単に受理しようとしなかったのは自然なことであった。

ムジールが自己の論文の弁護に成功し学位を授与されたのは1908年3月14日のことであった。シュツッガルトで四年半程前に立てられた目標はこのようにして達成されたが、前に述べたような事情から余り大きな達成感をムジールの心に呼び起さなかったのである。

論文の成果は余り香しくなかったが、彼が哲学研究を続けるチャンスはあった。グラーツ大学の助手の席がムジールに提供されたのである。しかし彼はこの申し出を簡単に断ってしまった。当時彼の心は完全に文学に傾き、処女作の大きな成功から推してなんとか作家生活に入ることが可能だと甘く考えていたのであった。この間の事情をムジールは後年多少後悔の念を交えながら自伝の試みの中で語っている。今、その長さをいわず引用するなら、

Es sieht aus, als hätte mein natürlicher Werdegang so aussehen müssen: Annahme der Dozentur in Graz. Geduldiges Tragen der langweiligen Assistententätigkeit. Geistiges Miterleben der Wendung in der Psychologie und Philosophie. Dann, nach Sättigung, ein natürlicher Abfall und Versuch, zur Literatur überzugehen.

Warum ist es so nicht gekommen? Daß wir vor der Heirat nicht nach Graz wollten, wäre zu überwinden gewesen. Entscheidend war daß ich naive Hoffnungen in den weiteren Verlauf meiner Schriftstellerkarriere gesetzt habe. Daß ich durchaus nicht wußte, wie gefährlich es im Leben ist, nicht seine Chancen auszunützen. (Provinziell großartig, verträumt großartig, Folge gesicherter Jugend.)

Anständigerweise, daß ich mich psychologisch nicht versiert genug fühlte und wenig Freude am psychologischen Experiment hatte; schon in Berlin dem Betrieb ferngeblieben war. Dummerweise, daß ich für mich die Vorstellung: man arbeitet sich in die Materie mit Energie ein, die einem das Leben über den Weg legt: nicht im mindesten anerkannte, sondern mit Energie nur machte, was ich mir selbst aussuchte. Wichtig: daß ich mich wohl immer mit Ethik befassen wollte, aber keinen Zugang wußte, der mir gepaßt hätte. Mit anderen Worten, daß ich zu wenig studiert hatte! Denn (Max) Scheler hat den Zugang gefunden! Daß ich mir eingebildet hatte, das Wichtigere wäre, was man will, aus sich selbst zu holen und erst zur Prüfung und Ergänzung Rat zu suchen. Bei der ersten Belastung durch das Leben ist das zusammengebrochen. Es wäre auch zu sagen: der Phantast hatte dem Denker ein Bein gestellt. (TAE S. 445)

してみると処女作の成功はローベルト・ムジールの生涯を決定したのである。1908年から1910年まで彼はベルリンに滞在して文芸雑誌 „Pan“ の編集に参加したり、友人フランツ・ブライ等の雑誌に寄稿したりする。この間にマルタとの仲は急速に深まり結婚が問題となってくる。1910年8月8日二年余りの断絶の後に再び書き始められた日記の冒頭にマルタの先夫の子供二人がはしかに罹っていると記されている。しかし彼にとってこの当時の重大な気掛りは子供のはしかではなく、さし当ってどんな職業につくかという問題であった。この日の日記にも「さし当って先のことは吾々には全く不確定だ」と記されている。この「吾々」が示すようにムジールはもうマルタのいない生活は考えられなくなっている。彼にとってはマルタとの結婚を考えるとどうしても生計の道を講ぜねばならなかった。彼はベルリン時代すべて父親の経済的援助に頼っていたのである。しかし既に学業を終えたロー

ベルトに対して父は独立することを要求し、その就職の心配をしていた。ムジールの気持としてはなんとかしてベルリンで雑誌編集のような仕事に携りながら作家生活を続けてゆきたかった。しかし彼の試みは失敗し、結局は父親の探し出したヴィーン工科大学付属図書館の司書の地位に甘んずることになる。1910年9月10日付で彼がベルリンから友人のアレッシュに宛てた便には次のように記されている。

Wird etwas aus Wien, dann betrachte ich mich als endgültig unter die Räder gekommen, wird nichts, ist es fast noch schlimmer. Zudem finde ich mein kommendes Buch scheußlich. (...) Unter allen diesen Umständen gehe ich ungern, mit dem Gefühl der Geschlagenheit, von hier fort. (LWW S. 277)

このように彼は全く打ちのめされた感情をもってベルリンを去ってゆくのだが、こうした敗北感の一因としてここに挙げられている「本」とは彼が1908年以来取り掛っている „Vereinigungen“ と題する二短編のことである。最初プライの求めに応じてあっさり引き受けたこの短編は、ムジールが努力すればする程困難な創作となり、ベルリン出発を間近に控えた今も完成していない。根本的には彼が物語性を脱却した全く新しい心理的な作品を書こうとして自己の方法を追求したためではあるが、「テルレス」のように蓄積された結果の創作ではないための、産出の苦しみであった。彼の文学は素人の域を離れて生活を賭けた真剣な努力となったのである。事実1910年の日記は従来と比べてはるかに分量が多くなり、その大半が創作上の困難や文学的テクニクの検討に当てられている。今や彼にとって文学を将来の職業とすることは確固たる決意となっており、彼はなんとか自己の創作方法を確立せんとして異常なまでに真剣な努力を傾注しているのである。〈しかしこの短編は遅々として一向に進捗せぬ。ベルリンを去る日は益々近づく。〉このような切迫した心境の中で本稿の最初の方に挙げたムジールの決算が書きつけられたのである。

以上のようにムジールの精神形成の過程を追求してみると、彼の決算は主観的には正しいといえる。少なくともベルリン修学時代の文学的創作に限定して達成された成果を見るならば、「テルレス」が唯一の産物である。しかし「テルレス」はベルリン滞在本来の目的を変更させ、作家ムジールが誕生する決定的な原因ともなったのであるから、単なる一作品以上の意義をもつ。ムジールの決算はこの点を見逃している。彼の哲学研究は学位取得で終わったのではない。既に「自己自身のと対話」において見たように彼の哲学は文学をも含めたもの、換言すれば文学に融合した広い哲学へと進展したのである。彼の哲学はまさに文学の中へ包摂されることによっていよいよ本質的なものに高められたといえよう。ムジールの内面における精神形成の方向に関するかぎり、哲学から文学への移行による断絶はなかった。ただ職業という観点からのみ転向が問題にできる。ムジールが1926年の O. M. Fontana のインタビューを受けて「特性のない男」について語ったとき、結びの言葉の中で „Ich möchte Beiträge zur geistigen Bewältigung der Welt geben. Auch durch den Roman.“ と述べていることはまさしくムジールの中に生きる哲学の現われであろう。ムジールの決算はこうした意味では正しくなかったのである。

(本稿は40年度文部省科研費による研究成果の一部である)

### Literaturangabe:

Musil, Robert: Tagebücher, Aphorismen, Essays und Reden. Gesammelte Werke in Einzelausgaben. hrsg. v. Adolf Frisé. Hamburg: Rowohlt 1955. abgekürzt: TAE.

Der Mann ohne Eigenschaften. Gesammelte Werke in Einzelausgaben. hrsg. v. Adolf Frisé. 5. Aufl. Hamburg: Rowohlt 1960. abgekürzt: MoE.

Dinklage, Karl: Robert Musil Leben, Werk, Wirkung. Lizenzausgabe bei Rowohlt. Copyright by Amalthea Verlag 1960. Wien. abgekürzt: LWW.

Berghahn, Wilfried: Robert Musil in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten.  
(Rowohlts Monographien) Hamburg: Rowohlt 1963.

Stumpf, Carl: In: Die Philosophie der Gegenwart in Selbstdarstellungen.  
hrsg. v. R. Schmidt. (Der ganzen Reihe fünfter Band) Leipzig: Verlag  
von Felix Meiner 1924. abgekürzt: Stumpf.

Musils Dissertation in Xeroxkopie.

Musil, Robert: Beitrag zur Beurteilung der Lehren Machs. Berlin-Wil-  
mersdorf: Verlag Carl Arnold 1908. abgekürzt: Diss.

注。

本稿の記述にあたって準拠した文献中の該当箇所はあまりにも多いので、いちいち明記しない。ムジール研究の現況については主として *Dvjs* Heft 3 / 1965 に収録されている Ulrich Karthaus: *Musil-Forschung und Musil-Deutung* (S. 441~S. 483) を参照した。

なお、ムジールの記録による以外、伝記的事実は *Dinklage* の記述にしたがった。